

シューベルトのSalve Regina in A, D676 (ソプラノ独唱と弦楽合奏)を購入しました。彼の時代はもはや教会音楽優勢の時代ではありませんが、このロマン派の時代で特筆してよいのはシューベルトによる一群の宗教作品ではないでしょうか？彼の音楽教育は宮廷礼拝堂の聖歌隊員が出発点でした。1816年、日記をつけ始めたシューベルトは「人類は信仰を携えてこの世にやってきた。信仰は知識や理解よりもはるか上位にある」と書き記しています。彼の宗教音楽を概観すると、ドイツミサも断片も含めてミサ曲が8曲、ミサ楽章(キリエなど)が13曲、レクイエムが2曲、サルヴェ・レジナが7曲、スタバト・マートル2曲、マニフィカート1曲、タントゥム・エルゴ6曲、枝の主日のための6つのアンティフォナ、またカンタータ「ミリアムの勝利の歌」「ラザロ、復活の祝日」や「父の霊名の祝日のために」、があり、重唱や合唱にも「Jesus Christus unser Heiland」や「Hymnus an den Heiligen Geist」など宗教的テキストを持つものが少なからずあります。

18世紀の初めころにはすでに聖母マリアに対する崇敬は盛りを過ぎていましたが、しかしそれにもかかわらず、シューベルトが7曲もサルヴェ・レジナを作曲していることから伺えるようにマリア・アンティフォナは依然として広く愛され、作曲され続けていました。

シューベルトが早くに母親を亡くしていること、ソプラノ歌手テレーズ・グロヴに対する満たされぬ愛、などが彼を聖母崇敬を向かわせたと指摘する学者もいます。彼はこの世の煩いを越えた完璧さをマリアに見ていました。調性のエートス論を擁護していたシューベルトはA dur という “無垢な愛”を示す調を選んでいきます。テキストに変更を加えたり、省略することを教会は禁じていますが、18,19世紀の多くの作曲家と同じくシューベルトもテキストの一部を変更していますのでご注意ください。

シューベルトの他の宗教作品で興味深いのは Evangelium Johannis (D607) というものです。独唱と通奏低音というこの時代にしては特殊な編成であり、ルター訳によるヨハネ福音書6章55-58までがそのままテキストになっているというもの。すなわち「私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物・・・これは天から下ってきたパン・・・」という箇所です。彼はカトリック教徒ですが、特定の教会の制約を受けなかったためプロテスタント教会のためにも作品を残すことができた作曲家でした。それが彼の教会音楽全体の特徴を形成していると言えるでしょう。

(杉本ゆり記)